竹と民間伝承

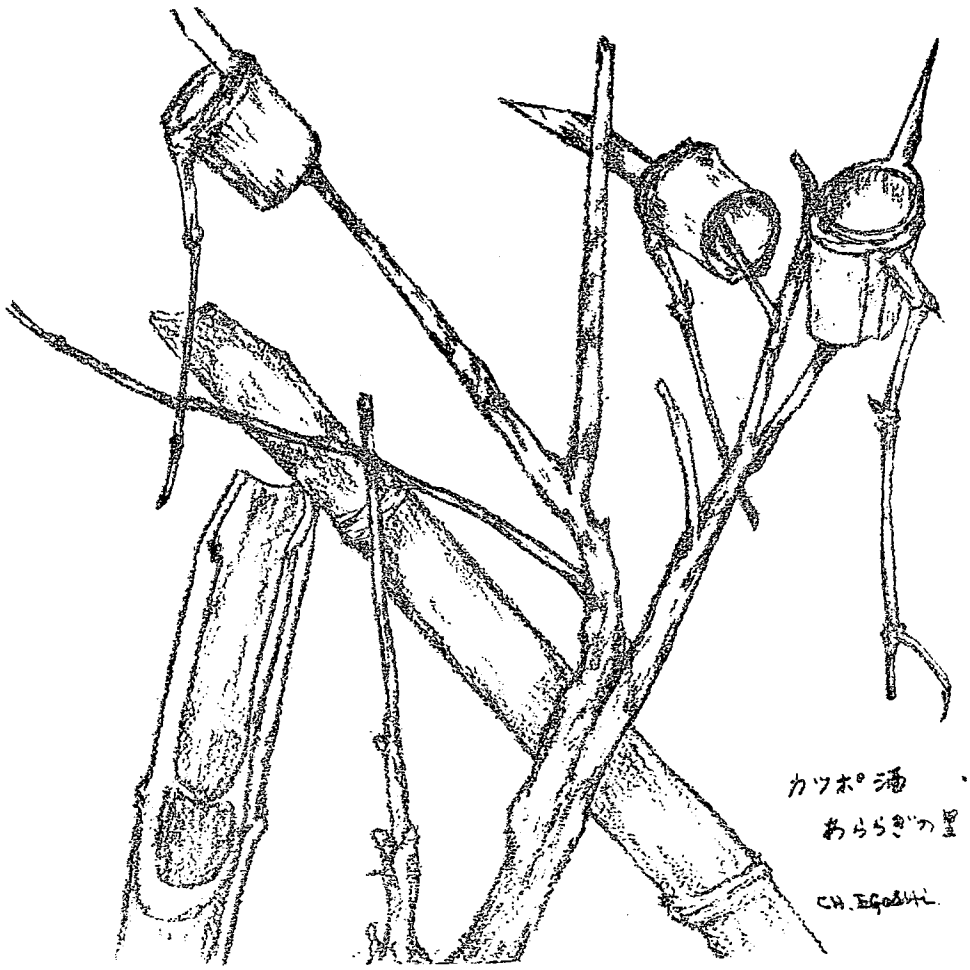
室　井　　綽

古代日本人と竹との連りが現代人の想像以上に深い関係があった。したがって何処においても、各地の有用竹と結び、それぞれの竹笹の性質をうがった、実に変化に富んだ伝承を伺うことができ、とても面白く子孫に伝えたいことばかりであるが、しかし時代の波は競えない。迷信や伝承を破る科学思想がひしひしと押し寄せてきているのである。いま代表的なものを拾ってみると、つぎのようなものがある。

ひとかまののや（一鎌笹の矢）

ヤダケの一品種で稈の長さ、特に節間がよく揃ったものである。そのうち2本が近づいて筍の出たものをソウセイヤダケ（双生矢竹）と呼び、これで矢を作ったものをヒトカマノヤと称し、弓矢を貴ぶ武人間に神格化さた、ヤダケの産地では伝説を作って特にもてはやした。かつて、源三位頼政は、この矢で禁裏において鵺（ヌエ）を射止めたという。ヌエとはサルとトラとヘビとの形を兼ねた異様の怪物で、毎夜、京都の御所付近に出没し、人々を悩ましていたと言う。

さて、このヌエを射たヤダケの出所は岐阜県鶴が城跡のものと言われ、現に天然記念物として保存されている。また、愛媛県赤藏が池畔であるとも言われ、二箆と言う地名までできた。ここは頼政の母が住んでいた土地で、母がここの矢を送ったものであるとも言われる。あるいは兵庫県多可郡重春村の長明寺のものであると源平盛衰記に出ていて、現に民謡となって頼政の塚とともに保存されている。また、この矢は佐渡のヤ

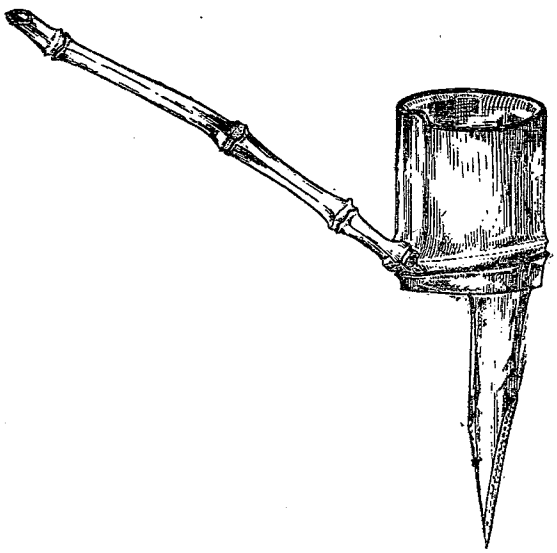


第1図　2本のタカンポとヨギリポッポを木の枝にかけたところ

ダケで作ったものであると地方の人は語っている。

かっぽ酒

宮崎県高千穂山麓あららぎの里にあららぎと言う草葺きの昔ながらの建物で、かっぽ酒を売る店が今に残っている。これは伝説によると、昔、平八と言う悪ものの一族が里に出ては住民などから金品を奪い、山中でやった誠に粗野な酒盛りの風習の一部であると伝えられている。もとはヤマドリを射て、土中に浅く埋め、その上で焚火をする。その焚火によりそって、青竹が斜に挿してある。その青竹は今のかんどっくりの原始的なもので、直径 6～7 cm ぐらいのマダケの先端を斜にそいで、多くは1節を抜き、酒か茶を入れてある。この容器をヨギリポッポ（ヨは節間の意）と呼び、焚火で竹筒の外部から温める。その傍にヨギリポッポと称する図のような即成の竹盃を枝に掛けて準備する。このヨギリポッポは竹の1節を残し、4 cm 内外の内側の深さとし、枝を1個残し持ち手とする。下部は長さ 5～7 cm の刺状物を残し、野外で酒を盛るときに芝地にたてることができるようにしてある。ヤマドリの焼けたものを掘り出し、手製の竹べら（ナイフの代用品）で切り、これを酒の肴とし、タカンポで



第2図　ヨギリポッポ

程よくかんされた、新鮮な竹の香の漂う酒をヨギリポッポに移し、楽しむのである。この酒をカッポ酒と呼んでいる。現在では、鳥はニワトリが用いられ、奇麗に羽毛と内臓とを除いて焼き、ヨギリポッポにカッポ酒を盛って酔わせ、次第に消滅していく、古い名残を惜んでいる。

現に別府などの土産物店でモウソウチクの2節を残して、表皮を剝いだ酒樽を作って、竹ガッポと称えて酒樽を売っているが、これはカッポ酒を入れるヨギリポッポの商品化したものである。また、この風習に関した方言は日本各地で広く分布していたと思われるが、次第に消えつつある。例えば茨城県などで子どもが竹筒のことをタカンポウなどと呼んでいるのがそれである。

ゴキダケ（御器竹）

箸を竹で作ったことは延喜式に出ている程であるから随分古いことである。野外の食事などにサクラ、ウメ、タケなど手近かの植物の枝が用いられた。そのうちでも、ゴキダケは節も低く、肉が薄くて、たやすく手で折れるので百姓や乞食が野外で昼食などをするのに早速、稈を手で折って箸として用いた。それで食器とそれにつけて用いる箸、すなわち御器もたぬほど、ひどくおちぶれたことを「御器もたぬ乞食」などと言い、侮辱した言葉までが生まれ、このことから竹の箸を用いることを忌む風習となったものである。その果て、栃木県、石川県、兵庫県では、火葬場の骨拾いの箸に青竹を用いるようになり、今日に及んでいる。上のような風習が各地におこり、それが相連続して全国的にきらわれることに進展した。そして竹箸、特に新鮮な青竹の箸を嫌うようになった。ここの御器竹は現代植物学者のいうゴキダケでなくしてネザサ節の総称である。

ささうお（笹魚）

チマキザサの節に笹魚と言う奇形ができて、五月頃に雨に打たれると川に落ちてイワナと言う魚になると徳川時代には信じられた。第3図中には、そのことを意味した狂歌が載っている。すなわち「イワナには、まだならずとも笹魚の、ささ（室井言う、酒の意）をすすむる一節となれ、荏野翁」である。特に飛弾の高山（タカヤマ）のものは有名で、しばしば有名人が随筆、歌などに紹介もし、また、明治天皇に天覧さえされたことがあった。実はこの笹魚は笹の芽のなかにササウオタマバエが産卵することによって、孵化した幼虫の刺激で、組織に一種のホルモンができ笹の芽の細胞の分裂が異常となり膨れた、つまり病気である。これは特に東北地方に立派なものが多くみられ、アズマザサ、チシマザサ、チマキザサにできたものが特に多い。琉球や台湾にもみられるが長さ 2～4 cm の小形のものばかりで普通の人々には見付からないのである。

第3図　笹魚の図　白雲山人の「竹実記」より

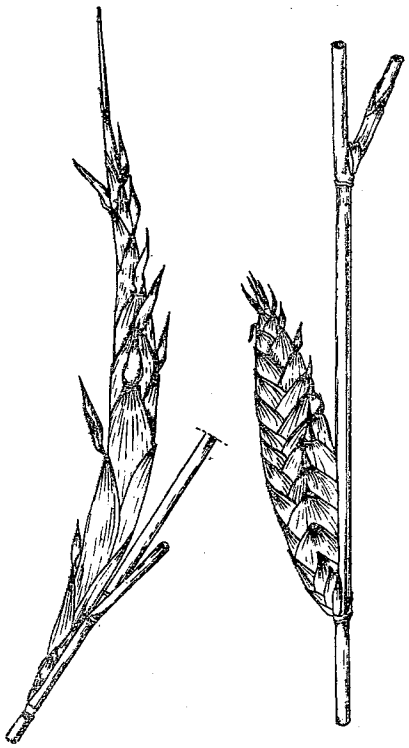
サカイダケ（境竹）

ホウライチクはマレー半島、中国南部辺の原産の外来の竹である。火縄銃の渡来とともに琉球を経てひそかに輸入された。その保護の対策として、各種の伝説を生んだ。この竹稈は柔らかで、槌で打って綯ったものが火縄である。しかし、文化の進むにつれて、火縄銃とともに見向きもされず、四国、九州、本州の静岡県の各地に野生状となったが、唯一のとりえは地下茎のないことで、山林の所有者などは、これを境界に植え、誰の所有権もないことにしている。その稈の柔らかいことを利用して、四国、九州の人々には柴を束ねるのに縄の代用にしている。

本種は上述のように、在来の竹と比べて地下茎が伸びないので、本州南部ではダンゴダケ(団子竹)とか、地下茎がすぐに伸長して稈になるので孔が殆んどなく水に沈むのでチンチク（沈竹）などと面白い方言がついている。

竹と台風

俗間でマダケ、ハチクなどの筍が去年の親竹を抜いて成長するのをみると、その竹は親竹を風害から守るためにより大きく成長して、親竹の保護に当るということで、竹がちゃんと秋の台風を予想してのことだと言う。しかしよく観察すると昨年成長した竹は枝葉を茂らせて先端が重くなり垂れるものである。稈の伸びきった六、七月頃に竹藪の背競べを眺めると総べての年が台風型になっているもので、特に秋、台風に会うようなことがあると一層強く誠しやかに、事実らしく力説するのである。

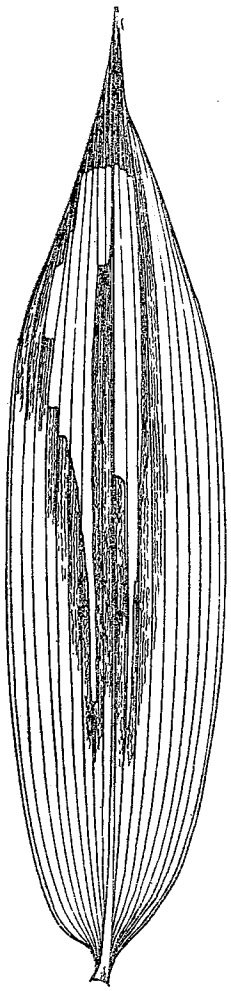


第4図　笹　魚
アズマザサについたもの（岩手県姫神山で採る）

弾除けの笹

岩手県の俗言によると「戦争の起る前兆としてアズマザサの葉に鉄砲弾痕ができる」と言う。この鉄砲弾痕とは葉には一列に数個の細穴ができたもので、ちょうど弾で打ち抜いたような形である。かつて太平洋戦争の勃発の年には、この弾痕が多くできたので戦争になると言って大さわぎしたことがあった。しかし、これは戦争とは関係のないことは、今更、ここに改めて言うまでもないことである。すなわち、これはウスイロカザリバと言う蛾の幼虫の食痕で、戦争の終った今日でも相変らず各地にみられているのである。

また、この現象は秋田県などでも広くみられ、弾痕笹（ダンコンザサ）などと丁寧に名前までついている。そのうち、仙北郡の浮島神社の境内のものは兵士が戦場で身につけていると弾が当らないとか、迷信は次から次へと方向を変えて伸びていったのである。



第5図　弾痕笹
イガササの葉（伊賀、上野で採る）

栃木県でもよく似た伝説があって、この食痕のある葉を1000枚集めて八幡宮に納めると弾丸除けの願いが叶うなどと誰かが言い出し、ネコの手も借りたい多忙な戦争中に、出征兵士の武運のためには、親戚一同がかい出されて集めたりしたことがあった。

さらに秋田県仙北郡でも、チマキザサ系統のものの葉先きを、ムグリカによってつくられた横に並んだ食痕が多くみられ、彼の地ではこれを機関銃の跡と言い、一度弾に当ったものは二度と弾が当らないなどと勝手な理屈をつけて、出征兵士が1枚ずつ身につけておくと弾除けになると言い出し、親族一同大童になって山地を探し歩いた由である。戦争中はこの迷信もなかなかの大流行をみせた。

迷信は戦争中のような人心の安定を欠いている時、一つの流行となってしばしばみられる。殊に、東北地方に笹に関したものが多いのは、この地帯が文化に遅れていることもあるであろうが、主な原因は岩手、秋田の地方は、チマキザサ、アズマザサの両系統が山も野も一帯に埋まっていて、どこよりも笹と地方人との接触が広いだけに、迷信も笹に関するものが多く生れたものであろう。

竹植える人は短命

竹の造林は明治の末期から大正の時代にわたって全盛期で、世界各地から竹材の注文の殺到したことは大方の皆さんは御承知のことと思う。当時、農林省などが鳴物入りで竹の栽培と増産を宣伝したものであるが、封建性の強い農家などでは、「竹を植える人は短命である。」などと勝手な理屈をつけ、植え付けを防害するものさえあった。短命の理由には、竹の節、すなわち、世が短かいと言うことである。御承知のように笹の字は竹と節の詰ってできた字なのである。それで、この諺は頑固な百姓と、それにイソテリが加担して作りあげた根も葉もない笑い草なのではなかろうか。

かつて、茨城県の長塚節は、若さと大地主の横暴さに物を言わせて、田圃の真中に一部の小作人から田をとりあげて、マダケの竹林を作った。竹藪の生育するにつれて、スズメがこの竹藪に集り田畑の米麦を食害すると言うので、小作人を泣かせ大反感をかったことがあった。この節は、偶然にも上の諺の通り働き盛りの37才で早死したことから、あるいは宮城県地方の、節に反感をもった百姓どもにインテリが加勢して作り出した諺かも知れない。

凡血の笹

千葉県清澄山中の清澄寺の本堂の裏に伝説の笹がある。寺の縁起によると、上人が15才の時に、堂内で21日間の断食を行い、満願の日に知慧の宝珠を菩薩から授った。上人はうれしさの余り、あわてて堂を出ようとして、昏倒し血を吐いた。その血を笹の根本に埋めたところ、その後に出る笹の葉は赤い斑点が現われるようになった。

と言うことである。その血は上人が凡夫の時の血であると言うことから、その笹を「凡血の笹」と呼ぶようになったとのことである。

この凡血の笹とは、メダケ自身に外ならない。この寺のここのメダケは老杉の元に生じており、スズメノタマゴ（竹蓐病菌）という菌が寄生し、この赤い斑点をつくり出しているのである。

日本の指導的な地位にある社寺仏閣の指導者は様々

の自然界の事象と神仏とを結びつけて伝説を作りあげ、そしてもっともらしく信仰にまで化してしまっているのである。こんなメダケなどどこにでもあるので、苦心して信仰に結びつけなくても、どこにでもみられるもので、極く普通の有用植物である。また、その寄生菌を保護するにいたっては以っての外だ。せっかく、日本人の盲信を利用するのならもっと、社寺の指導者は眼を開くがよい。珍らしい突然異変がみつかるはずである。この突然変異こそ大いに学界のために保存してもらいたい。これには日本人の盲信を利用しても、まぁまぁ罪は浅いと言えるであろう。

竜の化けたヤシャダケ（夜叉竹）

岐阜県揖斐郡坂内村川上の夜叉池の池畔に稈に美しい褐斑のあるヤシャダケが群生する。この斑は池の主の竜が竹に化けたと言われている。それでこの池畔から、他に移すと斑紋が出ないのであると言い伝えられ、事実、他に移植したり、他の土地に生えたヤシャダケにはこの斑は一つも見ることができない。

この斑は実は寒害のために稈が枯殆してできた斑で、春に出た若い稈は秋末まで普通の竹であるが、冬の寒さに会うとこの斑ができる。それで暖地や標高の低い処に移植すると斑が現われないのである。

また、ジャワ、中国南部の原産であるホウオウチク、ホウライチクなども生育限界地点で冬の寒さにあうと枝先きが黒漆色に色づき、みようによっては誠に美しいものである。なお同時に太い稈も殆んど生色を失い、葉を落してしまうが、春の暖みを増すに従って次第に生色をとり戻し、再び竹らしい色に戻り多くの葉をつけてにぎやかになるのが普通である。

縁結びの竹

過去の日本には出雲大社を初め、各地の神社境内で男女関係のとり結びについて占的な習俗がみられた。人間関係のすべては前世の宿縁による決定的なものと考え、そうした傾向が強かった当時の人々は、撰択的な男女関係もまた宿縁によるところとみていた。そして男女結縁に御利益があるとして相手の名を書いた紙片や髪の毛を竹、その他に結んで祈願をしたのである。

この縁結びの竹は不思議にも南方系の遠来のもののみが選ばれた。それは恐らく利にさとい神主か氏子中のインテリが思いついた仕業で、それには従来のありふれた普通の樹木より、一層形態の変った竹などをよりによって遠方から取り寄せて誠しやかに決めたものであろう。

しかし、時代の波は競えない。かつて随分多かった紙捻の数も敢戦とともにその数を減じ、迷信を破る科学の思想がひしひしと押し寄せているのである。

この縁結びの竹のうち、最も広く用いられていたのはゴサンチク、ヤダケである。

(1) ゴサンチク（ホテイチク）

この竹はもと中国のもので、今から249年前の1709年に日本に渡来したものである。本種は節が膨れて特異な形をするので、古くから日本人の関心も高く、名も五三竹（ゴサンチク）とか、ホテイチクと呼んでお目出たい名である。五三竹は漢名虎山竹をもじって、わざわざ三三五五と言うお目出たい日本の習慣に従わせ、ゴサンチクと名付けて、古くより縁結びの竹として広めた。また、ホテイチクは、節間が膨出するので布袋の腹にあやかって名としたものである。

そのうちでも有名なのは、奈良県国王寺の達摩寺のもので、かつて明治の時代までは、大いに縁結びを占ったとのことである。また兵庫県川西市多田町の多田神社の境内にも同様に縁結びの竹があって昔はよく活用した由である。

(2) ヤ ダ ケ

この竹はもと薩南列島のものであったと思うが弓矢の発達とともに栽培が東北方へ拡ったものであろう、徳川時代には各藩ごとに極秘に栽培したものである。例えば姫路藩では瀬戸内海の無人島にヤダケばかりを植えて研究させ、そして今日では矢の島と言う名にまで発展したのである。当時、弓矢は武士の生命に次ぐ重要なものであったから、この尊いヤダケを増やすに都合よくするために、一般大衆と結びつけねばならず、いきおい、縁結びの竹などと言う縁起のよいものに表面上あやからして、神社仏閣の境内にどんどんふやしていった。今日、大分の社寺にはその境内の一部に必ずといってよいほど、ヤダケの古い一叢がみられるのはこのためである。

有名なのは奈良県吉野の吉水神社の義経の植えたと言う縁結びのヤダケであろう。その他、ヤダケには方々に縁結びの伝説が伝っているが、何処も同じ淋しさには変りがない。

竹の移植は5月13日

中国の園芸書に「陰暦5月13日を竹酔日、または竹迷日と言い、この日に竹を植えればよく活着する」と言う伝説にわざわいされて、我が国でも古から竹の移植は5月13日がよいとされている。この竹酔日に竹の移植をすると傷つかず、絶対に枯死しないことに決っている。それで古老が若し、この日に竹の移植のできない時は「5月13日」と言うことを紙片に書いて竹に縛りつけておくと絶対に枯れないと言うことが伝えられている。また、どの字引をみても、竹酔日のことが書かれている。

いま、座右にある古園芸書を繙いて見てもいっこうにその理が書いていなく、中国からの伝来と言うこと

である。まあ、言わば伝説の部類などである。しかし、この頃は梅雨の期間などで水分が十分あるのでよく活着すると言うので、諺が作られたものであろう。とにかく、移植の時には水を十分やることが最大の条件である。

実際に、竹の移植は5月13日では遅い、やはり、竹類は筍の出る、ちょっと前が一番よく活着する。笹も同じことである。この時に地上茎を全部、伐り払って地下茎のみを植えると移植も容易であるし、筍もすぐ成長するので一挙両得と言うことである。それ故、3月中旬から4月中旬は最適の移植時である。

しかし、カンチク、シカクダケのように秋に出筍するものは出筍の9月中、下旬が最もよく活着する。

しかし、都合で春に植えなれない時は秋でもよい。この時は地上茎を全部刈り払うと殆んど枯れてしまう。稀れに活着しても細い筍ばかりで竹らしい竹にするには長年月を要するから地上茎に葉をつけて移植し、笹類では大きい葉を半分とか、三分の一を残して植え、竹の類では若干枝を間引いて植えるのがよい。

モウソウチクの筍を指差すと手が腐る

播磨でモウソウチクの筍を指差すと手が腐るという戒があって、子供などは竹藪、殊にモウソウチクの林の側に寄ることを嫌うのである。それで盗まれる心配もないので、モウソウチクの藪に限って垣をしないのである。

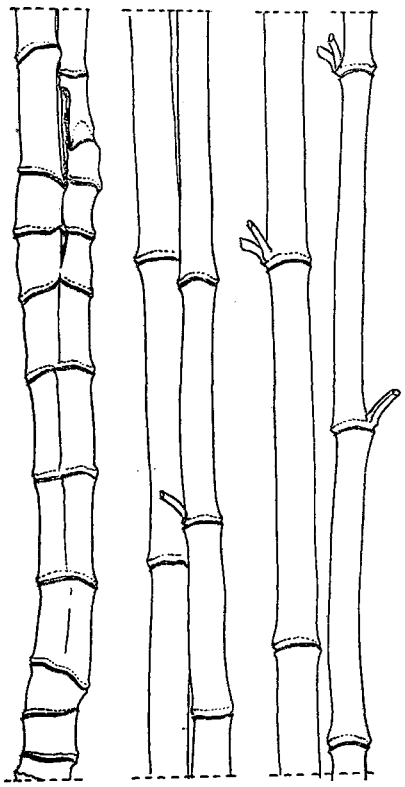
竹稈には各節にそれぞれ2つの環が相接しているので二輪状にみえる。上位の成長帯は多くの竹では突出しているのが普通である。殊に平地のように日光を受ける藪では著しく突出する。しかし、節間の短いモウソウチクはこの成長帯が殆んど平滑で発育しない。すなわち、節が一輪状である。それで結節が一輪状はモウソウチクのみであるので、節をみただけで他種から区別されるほどモウソウチクの稈のみが特異なのである。

以上のようなことから、マダケ、ハチクは節の低い、細工用の竹稈を作るためには高い厚い垣が必要となり、モウソウチクの垣にはその必要が全然ないので垣を作らない。従って垣がないと子供が時にいたずらをするようなことがあるので、筍を指差すと手が腐るなどと言うよい（?）諺を作ったのである。また、モウソウチクにはこの垣がない方が地面によく日が当り、大きい筍が早く出るし、手数もかからず一挙両得ということになる。

フタマタダケは凶竹か瑞竹か

竹は稈が1本直立して枝葉をつけることが普通なのである。ところが時に生長点が分岐したり、ずれたり、または枝が肥大して稈の太さ、あるいは稈より太くなることがある。

このようなものを一括してフタマタダケ（両岐竹、扶竹）と呼んで珍重し、しばしば見世物になる。朝倉



第6図　フタマタダケ
ハチクの両岐竹（兵庫県有年で採る）

無声の「見世物研究」によると、奇草木石類の見世物の始りは両岐竹であった由である。

ところが、このフタマタダケが出るのは凶事の前兆であるとする説と、瑞竹とするものと両説がある。凶竹説は松岡玄達の十品中の恰顔斎竹品に「フタマタダケを生ずると主を殺すことあり、俗にこれを嫌うなり。……」とあり、所有者を殺す前兆なりと述べている。しかし桂園竹譜には「……この竹の現れるのは、吉事の前兆なり。……」とする説がある。上のような事からか。日光東照宮を始め各地の神社、仏閣で宝物扱いを受けているのである。

この竹は前述のような成因で、マダケ、ハチク、モウソウチク、ホテイチクなどに突然に発生したもので、人間生活の吉凶とは何等の相関を示すものでないのである。言わば偶然の一致に意味ありげに結びつけて結論としたまでであって、取るに足らないことである。

竹の雌雄

明の李時珍の著、「本草綱目」は慶長11年（350年

前）に始めて日本に入り、本草学者の大典となり、7、8通りの和刻本が出版された。同書の第37巻、竹の条下に「枝の一なるものを雄となし、二なるものを雌となす。雌は筍を生ず。」もと漢文と。

わが国の有用竹、すなわち、マダケ、ハチク、モウソウチクは、いずれもマダケ属のグループであって、通常、1節から2本の枝が出るのである。この最下の節から枝の2本出たものを雌竹と呼び、1本出たものを雄竹と呼んでいる。このようなものを種苗として移すと筍が出ないなどと言われてきた。特に徳川時代にはあらゆる作物を上述のように雌雄に別けて、さらに雌を植えた方が有利であるなどと力説したものである。さらに驚くべきことには、昭和の今日でも、雌竹の方が筍が多く出るなどと結論づけた学者のあることである。

しかし、2本の枝が出ると言うのは太い方は枝であるが、小さい方の枝は、実は枝から出た枝、すなわち子枝であるので、前述の事柄が根拠のない事であるという事が判って貰えると思う。

この雌雄竹と言うのは、生殖器官に全く関係は無いし、この単枝で、稈の密生する藪に多く、雌竹は太いものに多く現われる。また、竹の種類によっても差が見られる。また、竹の種類によっても差が見られる。すなわち、マダケ林では単枝（雄竹）が30～35%、双枝（雌竹）が65～70%で、モウソウチク林では逆になって、雄竹の方が多く、70%も生じている。

なお、以上の外、若い男女が不義を重ねた罪で2人の持っていた杖が巻きつき根を生じた捻れ巻きつく話（竹と笹、73ページ）、親鸞上人がが竹の杖を地に挿し、枝が逆に生えたと言う越後七不思議の竹、すなわち、サカサダケの話（同、51ページ、天然記念物調査報告、植物の部、第3輯）などは大凡の読者に重複することと思うから省略した。

藤田保之・藤本義昭共著　学校園の栽培管理全書

B6判、クロース装幀、6色刷りカバー付、300ページ、**定価290円、送料25円**、口絵、写真アート紙4ページ、挿入写真128図、発行所、タキイ種苗株式会社（京都市下京区梅小路通り猪熊東入る）

学校園と言えば神戸市妙法寺小学校と全国の学校の先生方の頭に浮ぶほどに全国的に徹底した学校園、子供の心理とあつた生きた学校園で会員諸氏には既に御知承の通りである。（同園については、会誌、第2巻1号参照）。

この度、同校藤田校長と同校の学園主任であった藤本先生が共同で徹底した栽培指導の書で128枚もの挿入写真で親切丁寧に手にとるように解説がしてある。本書1冊で学校園の総べてが用を充すように工夫編集してある。著者10数年の努力と経験から滲み出た我国稀有の指導参考書である。学校の先生方は勿論のこと一般家庭の人々にとつても、子供を持つ親に結び付いた書物である。

本書の内容　1.学校園の目的と意義　2.学校園に植える植物　3.学校花壇の計画　4.農機具　5.肥料　6.薬剤　7.種子のまき方　8.取木　9.接木　10.挿木　11.土の作り方　12.植え方　13.球根植物の栽培　14.水栽培　15.水生植物の栽培　16.多肉植物の栽培　17.食虫植物の栽培　18 高山植物の栽培　19.温室の管理　20.学級園の栽培植物　21.ラベル　22.学校園12カ月　23.学校園を新しく造る参考例　24.栽培植物の解説　25.索引。

なお、本書は室井の処でも取り継がせて戴きますからお申し込み下さいますようお願いします。御注文は絶対安全な振替貯金を御利用下さいますようお願いします。

申し込み所　神戸市長田区片山町1の176　室井 綽
振替番号**神戸8941番**

昭和三十三年一月三十日　印刷
昭和三十三年一月三十日　発行

【非売品】

神戸市長田区寺池町一丁目
県立兵庫高等学校
発編集兼行者　室井 綽

神戸市葺合区二宮町一丁目
神戸市立二宮小学校
同　古川博二

明石市大藏谷
県立明石高等学校
会計　渋谷久雄

（兵庫県生物学会）
（振替口座神戸一七五〇一番）

神戸市長田区西尻池町五丁目一三
印刷所　高田印刷紙器工廠
電話神戸（代表）二六二五番

発行所　兵庫県生物学会